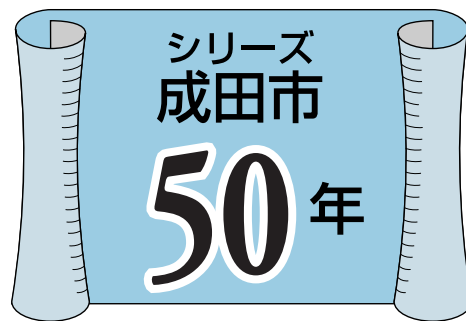


「観光と農業のまち」をスローガンに船出した新生成田市でしたが、病のため2年5カ月で石原貞三市長が辞任。昭和31年11月には市長選挙が行われ、藤倉武男氏が当選し、第2代成田市長に就任しました。

「健全なる田園観光都市の完成を目指して前市長の諸政策をさらに発展させる（『成田市政だより』昭和32年1月1日）」と所信を表明し、4期14年にわたる藤倉市政がスタートしました。

第1期目の主な事業としては、医療体制の充実、新市庁舎の建設、農業振興事業の推進、道路網の整備、衛生施設や教育施設の充実などが上げられます。



発展への足固め  
(昭和32～36年)

着々と事業が軌道に乗り始め、動き出した成田市

医師でもあった藤倉市長は、各地区で行われた住民検診に自らも検診に出かけました(昭和33年・八生集会所での住民検診)



健康づくり

無料の巡回健康相談所を開設

昭和31年4月に国民健康保険制度が全市に実施され、健康や医療に対する関心が高まり、同33年6月からは、毎週水曜日を健康相談日として、無料で市内各地を巡回しました。

特に、高血圧者には、食事療法や血管の強度などについての説明もあり、市民に大変喜ばれました。

「白亜の殿堂」と呼ばれた新市庁舎と市制施行5周年祝賀パレード(昭和33年10月31日)



新市庁舎の建設・市制施行5周年  
整地作業に自衛隊の派遣を要請

合併直後の市役所は、手狭な旧成田町役場。早くから移転と新庁舎建設問題が叫ばれていました。工事のために木更津航空自衛隊の派遣を要請し、ブルドーザーによる造成工事が行われました。45日間で整地作業は完了し、昭和33年4月に起工式、10月には完成。東久邇稔彦親王ひがしくになるひこをはじめとする700人の来賓を迎え、落成式を兼ねて市制施行5周年記念式典と「世界連邦平和都市宣言」が行われました。

新勝寺に泊り込み、栗山台地の整地作業を進める木更津航空自衛隊のブルドーザー。左上の道をのぼると京成成田駅(昭和32年11月)





昭和32年4月、市営球場（現栗山公園）で行われた第3回全日本豚共進会。農業の新分野を開拓するために、養豚や養鶏が奨励されたため、全国から参加した豚たちが優劣を競いました

新しい村づくりの方向を植え付ける役割を果たした成田市農村青年建設班（昭和34年）



**農業振興**

**村づくりは人づくりから**

昭和30年代は、農村の転換期でした。お米だけの原始的な農業から脱却するため、新たな村づくりや農業経営について、農家の青年たちを改築した旧遠山村役場に集め研修を行いました



火災や停電時の断水防止、夏季の渇水時に安定給水が可能になった東町の高架配水塔（昭和34年8月）

昭和34年6月、山之作に新築された市営火葬場。それまでの火葬場は、市役所の裏にあり、国鉄・京成成田駅にも近く、民家や商店街が密集しているために早急な移転が望まれていました

**建設ラッシュの公衆衛生施設  
ごみ収集は大八車から三輪自動車へ**

観光都市として成田が発展するためには、公衆衛生施設の整備や拡充は重要な問題でした。  
ごみの収集は、昭和30年から大八車（3台）に代わり三輪自動車<sup>（ごみ車）</sup>が導入されました。また、同33年4月からは家庭から出る生ごみを、一般ごみと分別し運搬する厨芥車<sup>（まじりごみ車）</sup>が購入され、同36年には吉倉に待望のごみ焼却場が完成しました。



完成した吉倉のごみ焼却場。しかし、都市化が進む成田市域全体のごみは処理できず、近代化された焼却場は昭和40年代半ばまで待たなければなりません